

ネットワークによる授業統合の爛熟期を迎えて

—当世風学生メディア・コミュニケーション行動の再考—

http://www.aoni.waseda.jp/akiokada/ e-mail: akiokada@u01.gate01.com

岡田昭夫（早稲田大学メディアネットワークセンター）

Key Words: ネットワークによる授業統合、授業連携、ネットワークコ・ミュニケーション

はじめに

筆者は、Table1 に示すごとく早稲田大学を中核として7箇所の大学で担当している医事法学や情報教育関連科目をネットワークで

Table1

| 大学名 | 科目名 | 学年 | 形態 | 単位 |
|--------|-------------|----|-------|----|
| 早稲田大学 | アカデミックリテラシー | 全 | 講義・発表 | 2 |
| 一橋大学 | 情報基礎 | 1 | 講義・発表 | 2 |
| 明治大学 | ICTベーシック | 全 | 講義・発表 | 4 |
| | ICT総合実践 | 全 | 講義・発表 | 4 |
| 東京医科大学 | 法学 | 1 | 講義 | 2 |
| 大東文化大 | 情報処理初級 | 全 | 講義・発表 | 4 |
| 関東学園大 | 情報プロジェクト実習 | 全 | 講義・発表 | 4 |
| | 情報基礎実習 | 全 | 講義・実習 | 4 |
| 東京情報大 | プレゼン演習 | 2 | 講義・発表 | 4 |

目ネットワークで統合し、他大学の学生との相互交流

を前提とする授業を展開している。これらを通じて、大学の枠を超え、インターネット上に浮遊する学校を体感できるような授業運営に取り組んでおり、この授業ネットワークは「プシュケ・ネット」と命名された¹。そして筆者は、早稲田大学メディアネットワークセンター内に設置されたネットワークによる授業統合研究部会を本拠としてかような授業統合の実践方法とその教育成果について実践研究を続けている。

現在、上記「プシュケ・ネット」の中でも早稲田大学・明治大学・一橋大学において筆者が担当する授業では、それぞれの大学の学生達が構成する課題研究班は、大学の枠を超えて共同研究を実施することのみならず、共同で研究成果を発表することを前提に授業を展開している。これによりネットワーク草創当初よりさらに充実した授業成果を得られるようになった。

ところで筆者がかような授業統合による教育実践の研究を開始した2000年の当初は、大学生にとってEメールやメーリングリストというメディアはまだ珍しく、それらによるコミュニケーションは新鮮であり、授業における強烈な動機付けとなったようである。そこでそれらの成果を基に筆者はネットワークを用いた授業展開の可能性と限界点の特定を試みた²。

しかしそれから10年以上の歳月が経過した。その間にコミュニケーション・メディアは爆発的に普及し日常化した。それゆえ現在の学生達にとりメディア・コミュニケーションに何ら新鮮な刺激になり得ないと思われた。

しかし、筆者に予想に反して、現在の学生達もネットワークによる授業統合に極めて強い刺激を受けている。そこで筆者は、その背景となっている学生達のメディア・コミュニケーションの特質を把握すべく、上記3大学の学生による合同研究発表の内容を分析し、授業終講時に質問紙調査を実施した。

そこで本稿では、それらの分析検討から、この10年間

で、学生のメディア・コミュニケーションの内容に質的変異が起こっており、それらが彼らの社会性に深刻な問題をなげかけているという現状を明らかにしていきたい。

【1】2000年授業統合草創当時の枠組み

(1) 課題研究テーマ

授業で取り扱う研究課題は、筆者の専門分野から候補を選定し、学生たちにその内容を概説する。そして希望調査を実施し、ひとつのテーマあたり5人程度で課題研究班を組織させる。取り扱うテーマは、脳死と臓器移植、安楽死と尊厳死、がん治療の現状と課題等の医療問題である。

(2) 参加大学

Table1の筆者が担当する授業のうち原則として、課題研究を課した授業のすべての大学の課題研究班を対象とする。ただし関東学園大学の情報基礎実習は、実質的にはコンピュータ・リテラシー様の科目であるのでそれを除く。

(3) 基本的ルール

- ①授業開始の当初に各大学の授業毎にメーリングリストを作成する。当該リストには各授業の各研究班の代表者のアドレスを登録しておく。
- ②各課題研究班には、例えば「がん治療の現状と課題」という漠然とした基本テーマから、班員の興味と問題意識を基に「重粒子線によるがん治療の方法とコスト」というように具体的な研究テーマへの絞り込みを行わせる。
- ③各研究班は全ての大学のメーリングリストにメールを発信し、自分たちの具体的研究テーマを紹介し、連携してくれる他大学の班を募集する。
- ④それを見た他大学の研究班は自分たちのテーマに近い内容を研究する班の誘いに応じて、連携関係が成立する。
- ⑤あくまで学生達の自主自学の精神とその問題意識を尊重する意味で、具体的テーマ決定は学生達の任意としていたので、近似したテーマを研究する班が他に無い場合は、連携関係は取れないことになる
- ⑥正確な数値を調査していないが、連携の機会を逸する班が毎年全体の30%ないし40%程度にのぼるものと思われる。そこでこの点は後述の方法で現在は解消している。

【2】草創当時の教育成果

当時、ネットワークによる授業統合の教育成果に対して、多方面から「専門科目の演習授業の成果と同等かそれ以上」との評価を得た。種々の拙稿の中で、筆者はその要因の分析を試みた³。それは以下の2つに集約される。①ネットワークにより出会った授業外の学生と共同

作業をおこなうという経験の新鮮さ。②文化系・社会科学系の学生には比較的縁の薄い医療問題に取り組むという新鮮さ。この2つが、鮮烈な動機付けとして機能するのであろう。以下は、履修学生が課題研究発表のレジюмеに記載した授業の感想である⁴。

集団で作業をするにはあまりに交流が少なすぎた私達は、まず人間関係を開拓するところから始めなければならなかった。思えばこのあたりからまんまと岡田ネットワークマジックにかかっていたような気がする。少しずつ前進する人間関係と緩和ケアへの知識。知らなかったことを知って自分の緩和ケアへの間違った認識をあらためることがだんだん楽しくなってきた。そして人とつながることの楽しさを知った時、私達は水曜の1限に大袈裟でなく命をかけていた。3ヶ月経った今、私達は集まれば自然に話ができる。「自分達の理想の緩和ケアができるホスピスを作りたいね」、なんていう話もして、あまりの入れ込みように苦笑いした。

この感想からも明らかなように、上記2要因に学生達は突き動かされて、自発的且つ極めて熱心に課題研究に取り組んでいた。

【3】2011年度以降の授業統合の枠組み

(1) 課題研究テーマ

基本的には従前と同じテーマを設定している。ただし、当代でホットなトピックが存在するときはそれも課題に取り込むようにしている。

(2) 参加大学

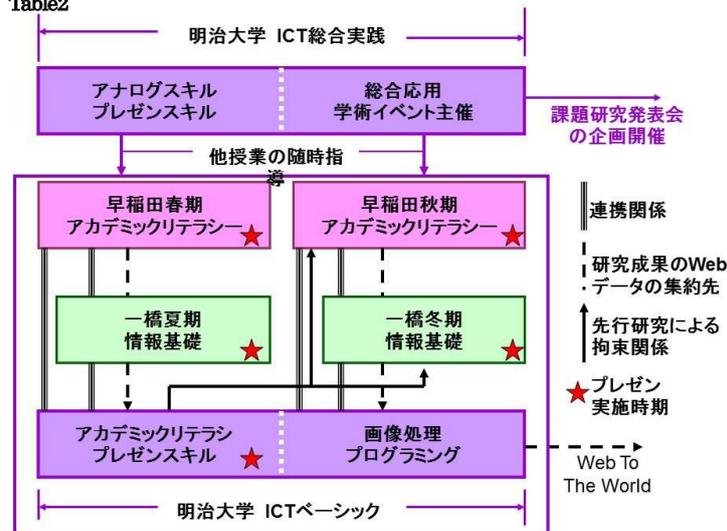
Table1の大東文化大学・関東学園大学・東京情報大学の各課題研究班は、従来通り連携への参加は任意としている。早稲田大学・明治大学・一橋大学の場合は、以下の基本的ルールで後述のごとく連携を必須として、共同で研究報告の最終プレゼンテーションを実施することを要求している。

(3) 基本的ルール

- ①研究成果の還元方法。各課題研究班の研究成果は最終プレゼンテーションで授業のクラス内に、Web ページ化して社会に還元する。
- ②3大学の各研究班に対して連携すべき他大学の研究班を筆者が指定する。その結果、3大学合同の拡大研究班が結成される。
- ③拡大研究班でひとつの具体的研究テーマを絞り込み共同研究を実施する。
- ④他大学との研究打ち合わせにはメディアを積極的に応用すること。
- ⑤合同プレゼンテーションの実施。研究発表の最終プレゼンテーションは各大学の各授業単位で実施するが、他大学の研究メンバーの顔が見えていること。ここでは「顔が見えていること」という漠然と抽象的な指示に敢えてとどめる。3大学の物理的距離や各メンバーのスケジュールの齟齬を克服するためメディア・コミュニケーションを利用するのも、実際に他大学に赴きプレゼンテーションに参加するのも任意とする。

⑥半年開講科目と通年科目のギャップの埋め方。Table2のごとく、大学のうち明治大学の授業のみは通年4単位

Table2



であり、課題研究のプレゼンテーションは前期末に実施する。そこで明治の研究班はまず前期の早稲田・一橋班と連携し課題研究を実施し最終プレゼンテーションを行う。早稲田・一橋の授業はこの段階で修了するが、明治は後期も継続する。そこでこの段階で前期の課題研究成果を、後でWebに公開するために明治の研究班が保管しておく。後期が始まると、新たな早稲田・一橋の授業が開講されるので、そこで誕生した新たな課題研究班と前期より続く明治の班が新たな連携を行う。

⑦先行研究の利用。後期に新たに参加した早稲田・一橋の課題研究班は、前期に既に成果を出している明治班の研究成果を先行研究と位置づけ、それを更に展開できるように研究テーマの絞り込みを行うことを必須とする。これにより、後期の学生達には、大学における学問研究には、先行研究の精査とそれへの立脚が重要であるという方法論を体験的に学ばせる。

⑧研究成果の全世界への発信。3大学の各授業の中でWebプログラミングの指導も実施している。明治大学では通年4単位であるので、前期にアカデミックリテラシーの指導を行い課題研究の最終プレゼンを終わらせる。そして後期には、新たな早稲田・一橋の課題研究班の参加を承け、前期の研究成果を先行研究とした課題研究を展開させる。そして明治の後期の授業では、画像処理技術とプログラミング技術の指導を中心に行う。後期には明治ではプレゼンテーションを行わないので明治のメンバーは早稲田・一橋での最終プレゼンに協力させる。その一方で前期・後期それぞれの課題研究の成果を、画像処理技術とプログラミング技術を活かして明治大学より全世界に向け公開する。

【4】授業統合における課題研究の展開

学生達は、まず他大学のメーリングリストを利用して、筆者に指定された提携すべき班に連絡を取るよう呼びかけるところから始める。その後、メーリングリスト・掲

示板・スカイプ等を用いて、あるいは実際に会って研究方針策定会議を開催する。その結果概ね次の2パターンに分かれる。①研究テーマを3つに細分化しそれぞれをそれぞれの大学が担当する場合、②ひとつのテーマを大学の枠を超えて文字通り全員で担当する場合に分かれる。

さて、課題研究報告の最終プレゼンテーション終了後

Table3

| | 一橋 | 早稲田 | 明治 | 合計 | 比率 |
|-------|-----|-----|----|-----|------|
| 1年生 | 182 | 90 | 45 | 317 | 65% |
| 2年生 | 19 | 48 | 27 | 94 | 19% |
| 3年生 | 0 | 34 | 16 | 50 | 10% |
| 4年生以上 | 1 | 19 | 4 | 24 | 5% |
| 総計 | 202 | 191 | 92 | 485 | 100% |

に授業連携に関して事後アンケート調査を実施した⁵。その属性は Table3 を参照されたい。それに

よれば、Table4 のごとく、この授業以外でネットワーク上でコミュニケーションを取り、それに引き続きネットワーク上で又は実際にあって共同作業をした経験がある

Table4

| | 一橋 | 早稲田 | 明治 | 合計 | 比率 |
|----|-----|-----|----|-----|------|
| ある | 24 | 38 | 15 | 77 | 16% |
| ない | 171 | 150 | 77 | 398 | 84% |
| 総計 | 195 | 188 | 92 | 475 | 100% |

者は全体の 16% に過ぎない。その経験者のほとんどは、友人間やサークルの交流に用いたというものであり授業での経験は皆無に近い。草創から 10 年を経ても、ネットワークによる授業統合が学生にとって強烈な学習動機付けとなっている背景にはかような要因がある。

また、Table5 が示すように、学生達が通常使うコミュニケーション・メディアの殆どは携帯電話の E メール機能(94%)であり、コンピュータの E メールとの回答は 55%でしかない。またオンデマンドではない同時参加型のメディアの日常的な使用率は未だ低く、スカイプが 37%で、やチャットが 14%であった。学生達は、非対面性・オンデマンド性にメディア・コミュニケーションの主たる利便性を見いだしているということであろう。

Table5

| | 一橋 | 早稲田 | 明治 | 総計 | 比率 |
|--------------------------|-----|-----|-----|------|------|
| ケータイのメール | 184 | 180 | 91 | 455 | 96% |
| PCのメール | 115 | 109 | 38 | 262 | 55% |
| ケータイのテレビ電話 | 3 | 7 | 2 | 12 | 3% |
| ブログ | 22 | 26 | 20 | 68 | 14% |
| ホームページの掲示板 | 20 | 17 | 6 | 43 | 9% |
| チャット | 25 | 28 | 13 | 66 | 14% |
| スカイプ等のPCを使ったオンラインミーティング | 81 | 77 | 20 | 178 | 37% |
| ツイッター | 63 | 67 | 35 | 165 | 35% |
| その他 | 15 | 24 | 14 | 53 | 11% |
| ネットワークでコミュニケーションを行うことはない | 0 | 0 | 0 | 0 | 0% |
| 総計 | 527 | 534 | 238 | 1299 | 273% |

しかし、彼らが考えるその利便性が、実は彼ら自身を苛むことになる。すなわち初めは筆者の指示により、他大学の授業用メーリングリストを用いて他大学の連携班に返信を呼びかける。その返信を待って、研究テーマの具体的絞り込みに取りかかり、さらに分担して作業を進めようとする。しかしメールのオンデマンド性故、相手の返信を待つ時間が必要となる。実際に分業を開始しても、相手がどこまで進捗しているのか把握するには相手の返信を待たねばならない。時間が空費される、焦りが募る。ようやく返信が返ってくると相手の作業は予期せぬ方向に進んでいた。メールの非対面性故のコミュニケーション不足が原因で、行き違いが生じていたのである。

以上がしばしば起こるシナリオである。この段階に至り、彼らは二極化する。すなわち、事後のアンケート調査によると、一方では、オンデマンドのメディアにおける相手が見えない不安⁶やそれ故のコミュニケーションの行き違いを避けるべく⁷、他大学の連携相手が決まると、スカイプやチャット等の同時参加型のメディアを用いるか、実際に面談を重ね作業を進めるグループが生まれる。他方、スケジュールを調整する煩雑を忌避し、あくまでオンデマンド型のメディアに固執するグループもある。その中にはごく希ではあるが、非対面性・オンデマンド性という特質に乗じて、非協力的な沈黙を続け他大学の作業進捗の障害となる班も現出した。この点を指導者側としてはどう意義づけるべきか、後述したい。

【5】授業統合における課題研究の成果

事後アンケート調査では、実際に三大学合同で会って作業を進めた研究班が全体の 69%にのぼり、そうでない班の割合をはるかに上回った⁸。課題研究成果の質的評価を数値化して客観的に提示することはしないが、一般的に言って対面方式で作業を進めた班の方がかなり高い傾向にある。実際に会うという煩瑣な手続を経て作業を進めるだけモチベーションが高いわけであるから、当然の帰結と言えようか。

具体的な共同作業の内容を検証しても、たとえば「安楽死・尊厳死」研究班では、安楽死の事例調査を明治班が、宗教倫理を早稲田班が、安楽死の法制度を一橋班が担当し、安楽死をめぐる日本人の感情について三大学合同で巣鴨の地藏通りで高齢者に聞き取り調査を行うというように⁹、広範囲且つ充実した成果を挙げた研究班が大多数にのぼった。

このように、ネットワークによる授業統合を通じて、学生達はそれを人とつながる契機として、その向こうにいる生身の人間と繋がることに歓びを見だし、それが強烈な学習モチベーションとなることは、この 10 年以上の成果から明らかである。

【6】学生のコミュニケーション行動の再考

事後アンケート調査では、授業連携の利点として「研究視野の拡大」を挙げる者が 45%(217 人)、「共同作業それ自体の面白さ」が 28%(138 人)であった¹⁰。他方、Table6 のごとく、授業連携の欠点として「オンデマンドの欠点（返信に時間がかかる、相手がレスしないという

Table6

| | 一橋 | 早稲田 | 明治 | 総計 | 比率 |
|---|-----|-----|-----|------|------|
| インターネット、ケータイやPCのメールなどめづらしくない。 | 175 | 161 | 80 | 416 | 88% |
| ケータイのメール以外ほとんど使わない。 | 6 | 8 | 9 | 23 | 5% |
| インターネットもケータイのメールもほとんど使わない。 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0% |
| 器械でのコミュニケーションは物珍しくて面白い。 | 15 | 13 | 10 | 38 | 8% |
| コミュニケーションに器械を使うことに抵抗がある。 | 24 | 23 | 10 | 57 | 12% |
| 誰かに見られているのではないかと心配になる。 | 36 | 55 | 12 | 103 | 22% |
| 相手のことが見えすぎないので、好都合だ。 | 33 | 27 | 10 | 70 | 15% |
| 匿名等の機能が使えてこちらのことは見られすぎないので気楽だ。 | 41 | 36 | 19 | 96 | 20% |
| 匿名等の機能が使えるので、相手のことがよく分からないので不安だ。 | 68 | 85 | 36 | 189 | 40% |
| 対面式コミュニケーションとは違って制限された情報下でのやりとりがゲーム感覚で気楽で面白い。 | 21 | 16 | 9 | 46 | 10% |
| 対面式コミュニケーションとは違って制限された情報しか入ってこないで人と付き合っているという感覚が持たない。 | 45 | 51 | 13 | 109 | 23% |
| メール等のインターネット上で付き合うだけの相手は気楽でいい。 | 27 | 16 | 7 | 50 | 11% |
| メール等のインターネット上で付き合うだけの相手は持ちたくない。 | 79 | 72 | 40 | 191 | 40% |
| 友だちに電話するなら家電じゃなくケータイにかける方が気楽だ。 | 127 | 128 | 65 | 320 | 67% |
| 相手がどこで何をしているかわからないのでケータイにかけるのはちょっと気が引ける。 | 39 | 38 | 14 | 91 | 19% |
| 総計 | 736 | 731 | 334 | 1801 | 379% |

することもできない)」を挙げる者は35%(167人)にのぼった¹¹。「やはり実際に会うのが一番良い」という感覚は10年経った今でも基本的に学生の中に根付いていると言えよう。

しかし、筆者が危惧する状況の存在も明らかになった。すなわち事後アンケート調査では、ネットワーク・コミュニケーションの特質を学生達がどう評価しているかについて、Table7に示すように、「メール等のインターネット上で付き合うだけの相手は」という質問に対し「気軽にいい」と答えた学生が回答者全体の11%(50人)であり、「持ちたくない」が40%(191人)であった¹²。また「ネットワーク・コミュニケーションは対面式とはひと味違って、匿名やバンドルネーム、文字だけのつきあい、2次元の画像の中だけ等の制限された情報下でのやりとり」なので「ゲーム感覚で気軽に面白い」が10%(46人)であり、「人と付き合っているという感覚が持てない」

Table7

| | 一橋 | 早稲田 | 明治 | 総計 | 比率 |
|--|-----|-----|-----|-----|------|
| オンデマンドの欠点(返信に時間がかかる、相手がレスしないなどどうすることもできない) | 55 | 72 | 40 | 167 | 35% |
| 実際に活動予定を合わせる困難性 | 28 | 52 | 24 | 104 | 22% |
| 対面していない不便さ(違和感・不安感・行き違い) | 34 | 28 | 15 | 77 | 16% |
| モティベーションの温度差 | 19 | 37 | 13 | 69 | 15% |
| テスト期間との競合 | 0 | 1 | 2 | 3 | 1% |
| キーパーソンを作ることが難しい | 1 | 4 | 1 | 6 | 1% |
| 意思統一・意思疎通の困難性 | 21 | 29 | 26 | 76 | 16% |
| 大学間の情報環境格差 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0% |
| 授業の進度差の克服の困難性 | 5 | 5 | 5 | 15 | 3% |
| その他 | 15 | 17 | 8 | 40 | 8% |
| 総計 | 178 | 247 | 134 | 559 | 118% |

が23%(109人)

であった¹³。両設問とも、後者の回答比率が前者の約3倍前後になった¹⁴。これらの回答比と、上述の実際に他大学の連携班と会って作業を進めた班とそうでない班との割合

が近似しているのである。

この1年半、筆者は早稲田・明治・一橋の履修学生達に、他大学の研究班との連携任意から必須に改め、授業統合を強化した。それ故、従来を超える教育成果を得られるのはある意味、当然であろう。しかしその反面、会わないでメディアを使って手間をかけないで済まそうと、安易なメディア・コミュニケーションの利用に走る者も着実に増加傾向にある。メディア・コミュニケーションにおける非対面性・オンデマンド性が、学生に気楽さをもたらし、それらが社会的責任の軽減または免除を意味するという誤解を生み、その誤解が着実に蔓延し始めているのではなかろうか。上記のごとき課題研究における連携の二極化は、そのことの証左ではなかろうか。かような浅薄なメディア・コミュニケーションに慣れてしまった学生にとり、ネットワークで出会った他大学の学生と責任をもってひとつの仕事を成し遂げることが新鮮に映るは当然であろう。

おわりに

メディア・コミュニケーションが爆発的に普及しても、それは社会的意味において、実際に対面するほど濃密なコミュニケーションにはなり得ないことを学生たちは授業連携から学び、やはり会うのが一番と感じた。しかし次善の策としてのそれらメディア・スキルの習得も今日の社会的趨勢から鑑みて必要なことは明らかである。そこでそれらスキルの文化的社会的特質や意義をいかに特定し教育していくべきか、今後の課題である。

¹ 今日に至るまでの筆者のネットワークによる授業統合の展開過程については拙稿「遠隔授業の代替機能とその限界に関する一考察」(「コンピュータ&エデュケーション」Vol.14pp.51-56、柏書房、2003年6月)注1を参照されたい。

² 当時のネットワークを用いた授業実践の可能性と限界点の研究については、拙稿「等閑視できない教場の論理—新世紀の授業にとって遠隔は福音か—」(全私学新聞2002年12月13日号第一面論壇)、拙稿「遠隔授業の代替機能とその限界に関する一考察」(「コンピュータ&エデュケーション」Vol.14pp.51-56、柏書房、2003年6月)、拙稿『「本番で学ぶ」プッシュ・ネットのネットワークと遠隔授業』(「2003PC Conference 論文集」pp.77-80コンピュータ利用教育協議会、2003年8月)、拙稿「プッシュ・ネットの実践から捉えた遠隔授業像—遠隔授業の代替機能とその限界に関する一考察(続)—」(「平成15年度情報処理教育研究会講演論文集」pp.491-494、文部科学省・北海道大学、2003年11月)。「ゆるやかな遠隔授業から見た『教育の情報化』と『情報教育』—ポスト情報リテラシー教育への一考察—」(「コンピュータ&エデュケーション」Vol.17pp.18-28、東京電機大学出版局、2004年12月)参照、等参照。

³ 注1参照。

⁴ 早稲田大学MNC情報処理入門2001年度#17クラス緩和ケア班レジュメより抜粋

⁵ 各授業で最終的な研究報告プレゼンが終了した後、インターネット上に掲載した質問紙を表示して、教室内で筆者と対面式で回答させた。

⁶ Table6参照

⁷ Table7参照

⁸ 早稲田・明治・一橋の各大学の各授業の課題研究班を合計すると年間88班にのぼるがそのうち61班が1回以上他大学の研究班と実際に会って作業を進めていたことが事後アンケート調査から明らかになった。

⁹ 2011年度アカデミックリテラシー#10安尊班、#12安尊班、明治大学情報基礎論水曜5限、一橋大学夏学期情報基礎金曜5限の合同安楽死尊厳死班の研究より。

¹⁰ 任意回答で、複数回答可の設問のため、回答総数(2368件)は回答者総数(636人)と一致しない。そのため上記比率は回答者総数のうち何人がそう感じたかの割合で算出している。

¹¹ 注10に同じ。

¹² 注10に同じ。

¹³ 注10に同じ。

¹⁴ 注10に同じ。